

さきたまの博学連携

大谷直紀

1 はじめに

新学習指導要領が告示され「社会に開かれた教育課程」の実現に向け、学校と地域や社会教育施設との連携が盛んに言われている。埼玉県においても、今年度から文化資源課が中心となり、「博物館・美術館等を活用した子供パワーアップ事業」が実施され、今まで以上に博学連携の重要性が増してきている。

だが、博学連携の重要性が言われてきたのは最近のことではない。これまでの当館の館報や紀要を紐解くだけでも、多くの実践が行われてきたことがわかる。平成が終わりを迎える今、これまで「さきたま」が行ってきた博学連携の実践をまとめ総括しておくことは、今後の博学連携の在り方を考えるためにも有益である。

そこで本稿では、これまでの館報の記載・調査研究報告、および研究紀要から博学連携の取組について取り上げ、その概要を整理するとともに今後の当館での博学連携の在り方について考察していきたい。

2 「さきたま資料館」における博学連携

1987(昭和62)年の臨時教育審議会第三次答申において「学社連携」の言葉が使われ始めたころ、これに前後して、さきたまの博学連携事業がスタートした。ここでは、1989(平成元)年から2005(平成17)年までの「さきたま資料館時代」の取組について概観していきたい。

(1) さきたま風土記の丘教室

この事業は1984(昭和59)年から始まったものである。当初は、古墳に関する講義等を中心に行っていたが、1986(昭和61)年からは、夏休みの親子連れを対象に埴輪づくりを始めている。また、同じ年には、県民の日記念事業として古墳群見学会が行われている。この事業は、現在行われている「古墳群ガイドツアー」につながるものである。

1991(平成3)年、1992(平成4)年には、親子対象の発掘実習が行われている。発掘実習については、この2年間しか実施されていないが、学芸員の作業を体験できる事業として貴重である。

親子向けの学習が、学校向けの体験として変わるきっかけになったのが、1995(平成7)年から始まった「まが玉づくり」である。最初は、夏休みの風土記の丘教室の一つの事業として行われていたが、その後回数を増やし、学校への出前授業で実施したり、当館で学校団体を受け入れたりするようになった。現在、まが玉づくりは、当館の看板事業として定着しており、年間1万人以上がまが玉づくり体験を行っている。

さきたま風土記の丘教室では、製作体験だけでなく様々な事業も行われている。1995(平成7)年から1998(平成10)年にかけて行われた「古代劇」の上演や、1997(平成9)年から翌年にかけて行われた「古墳ウルトラクイズ」がそれである。古代劇については、時代考証に課題があるものの、

古代の歴史について体験的に学べる手法としては画期的なものである。古墳ウルトラクイズも、当時のテレビ番組の影響で行われたものであるが、古墳群を使って大がかりなクイズを行うという発想は斬新である。

1999(平成11年)からは、「古代米クラブ」が始まった。館の近くの水田で古代米の田植えから稲刈り、試食まで行う体験活動である。年度によっては、古代米の試食だけになる時期もあったが、現在では当館が総合教育センター江南支所と連携し行っている「古代米くらぶ」に継承されている。



古墳ウルトラクイズ



古代米クラブ

(2)土曜おもしろ博物館、わくわくサタデーミュージアム

1992(平成4)年から学校週休2日制が始まり月1回の土曜日が休みに、1995(平成7)年からは月2回の土曜日が休みに変わった。そこで、県立博物館でも土曜日に地域で学ぶという趣旨から、「土曜おもしろ博物館」の事業が1992(平成4)年から始まり、子供の利用が注目された。のちにこの事業は、「わくわくサタデーミュージアム」として引き継がれ、現在も行われている「さきたま古代体験」にもつながっていく。

最初に実施されたのは、ワークシートを活用した館内オリエンテーリングや、古墳群オリエンテーリングである。ワークシートを用いて博物館や古墳を探検するという手法は、子供たちの興味・関心を高められるものである。

2001(平成13)年、2002(平成14年)には、「ハニワを復元しよう」が行われている。これは、参加者が破片をのりで接合し、埴輪の模造品を復元するというものである。使っていた破片はレプリカであるが、学芸員の仕事を体験する試みとして注目される。

2003(平成15)年からは、「わくわくサタデーミュージアム」がスタートし、新たに「ペーパークラフト鉄剣づくり」が行われた



ハニワを復元しよう

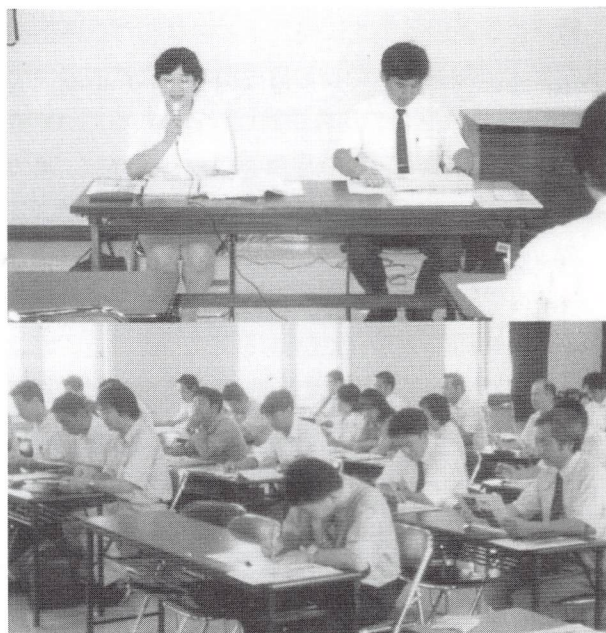
り、現在も続く「火おこし」体験が始まったりしている。

「縄を作ろう」「七夕馬をつくろう」などの民俗に関する体験学習が数多く行われているのもさきたま資料館時代の特徴である。

(3) さきたまアカデミア「博学連携」

1997(平成9)年から始まった社会教育機関の生涯学習担当者と、小・中学校の教員を対象とした研修会である。内容は、はにわづくりやまが玉づくりなど、体験的な内容が多いが、年度によっては小・中学校の教員から博物館を利用した授業の取組が発表されている。2002(平成14)年の学習指導要領の改訂で、小中学校で総合的な学習の時間が開始されることに伴い、博物館の利用が注目されたこともあり、多くの参加者がいたことや各学校から博学連携の事例発表が行われているのが特筆される点である。

現在では、博物館活用講座として事業自体は残っているが、参加者が非常に少なくなっている。「働き方改革」などにより、教員の出張や研修は減る傾向にあるが、博学連携を考える上で教員研修は非常に重要な位置を占めるものである。当時の手法等を再検討し、今後は研修内容等を考えていきたい。



さきたまアカデミア

(4) 授業での連携

① 出前授業

教員籍の職員がいた時期のみ活動が記録されている。教員籍のいない時期については、詳細は不明である。行われた実践については当館の研究紀要に掲載されており、そちらを参照していただきたいが、学校でのまが玉づくりや6年生社会科における古代の授業などを、各学校と綿密に打ち合わせ実践しているのが特徴である。

② 当館を活用した授業

当館を活用した小中学校の「総合的な学習の時間」の授業は、様々な学校で行われている。そのほとんどが当館を見学し調べ学習を行い、場合によっては学芸員に質問をするなどして、自分たちでまとめ発表する授業である。

ここでは、1996(平成8)年に実施された川里村立屈巢小学校の実践「米づくりのむらから古墳のくにへ」を取り上げたい。この実践は、総合的な学習の時間が開始される前の社会科授業の実践であるが、当館を見学するだけでなく、職員に聞き取り調査を行い、まとめたことを劇や紙芝居に表現するという活動を行っているのが特徴である。以下、授業の流れを示す。

時間	主な学習活動
1	・米づくりが始まったころの様子と米づくりが広がったころのの様子を想像図を比べて違いを考える。
2	・弥生時代と古墳時代の概略を年表や想像図などを活用して調べる。
3	・大きな古墳が造られたことを知り、「さきたま古墳群」と「さきたま資料館」を見学する計画を立てる。
4 5	・「さきたま古墳群」や「さきたま資料館」を見学する。
6 7	・見学をもとに、自分の課題について、自分なりの方法でまとめる。
8	・調べたことを発表する。(古代劇、模造紙、新聞、紙芝居)

児童がさきたま資料館と連携した社会科の特別授業が二十三日、川里村の屈巢小学校(高橋豊三校長)で行われ、子どもたちが同館学芸員から

さきたま資料館と連携授業 古墳テーマに聞き取り調査

の聞き取り調査など、まじりに、古墳時代の学習に当たって、同館を積極的に活用し、より充実した内容の授業を自指すもの。文部省の学習指導要領も地域の博物館、郷土資料館と学校との「博学連携」の方針を打ち出している。



この日の授業に準じ、六年一、二組の児童五十人、両クラスは八日に同館を見学、学歴の渡辺勲主査から古墳も出土品について説明を受けた。その後、それぞれのテーマに基づいて、土、日曜日も放課後に同館を訪問し、学芸員から話を聞くなどの学

古墳時代の学習に当たって、同館を積極的に活用し、より充実した内容の授業を自指すもの。文部省の学習指導要領も地域の博物館、郷土資料館と学校との「博学連携」の方針を打ち出している。

この日の授業に準じ、六年一、二組の児童五十人、両クラスは八日に同館を見学、学歴の渡辺勲主査から古墳も出土品について説明を受けた。その後、それぞれのテーマに基づいて、土、日曜日も放課後に同館を訪問し、学芸員から話を聞くなどの学

を進めてきた。

授業内容は調査の発表と古代劇の上演の二本立。発表組は古墳とは何か「古墳はなにをなせられたのか」といったテーマごとにグループで発表。それぞれ模造紙にまとめて披露した。

古代劇の上演は歴史上の人物を演じることで理解を深めてもらう体験学習。昨年七月に同館職員らが上演したシナリオを子ども向けにアレンジ、衣装も貸し出した。

子どもたちは土器や石にわたる小道具を約一週間かけて準備。金鐘鈴剣が出土した稲荷山古墳がテーマでをつつた「さきたま物語」を、十八人が熱演した。

資料館側で指導にあたった渡辺主査は「まず歴史に興味を持ってもらうことが大切。自分たちで調べたり劇をやったことが、次へのステップになれば」と話していた。

古代装束に身を包んだ子どもたちが上演した「さきたま物語—稲荷山古墳ができるまで」＝屈巢小学校体育館

の聞き取り調査など、まじりに、古墳時代の学習に当たって、同館を積極的に活用し、より充実した内容の授業を自指すもの。文部省の学習指導要領も地域の博物館、郷土資料館と学校との「博学連携」の方針を打ち出している。

屈巢小 古墳劇上演で成果発表

を進めてきた。

授業内容は調査の発表と古代劇の上演の二本立。発表組は古墳とは何か「古墳はなにをなせられたのか」といったテーマごとにグループで発表。それぞれ模造紙にまとめて披露した。

古代劇の上演は歴史上の人物を演じることで理解を深めてもらう体験学習。昨年七月に同館職員らが上演したシナリオを子ども向けにアレンジ、衣装も貸し出した。

子どもたちは土器や石にわたる小道具を約一週間かけて準備。金鐘鈴剣が出土した稲荷山古墳がテーマでをつつた「さきたま物語」を、十八人が熱演した。

資料館側で指導にあたった渡辺主査は「まず歴史に興味を持ってもらうことが大切。自分たちで調べたり劇をやったことが、次へのステップになれば」と話していた。

埼玉新聞(平成8年5月24日付)

この授業は、現在、当館と文化資源課が連携して行っている「博物館・美術館を活用した子供パワーアップ事業」と目的を同じとするものであり、特筆されるべき実践である。

(5) さきたま資料館時代の博学連携の考察

この時代に行われた取組は、現在まで続くものが多い。しかし、博学連携の優れた実践が職員個人によってなされたものもあり、組織として行われていないことが課題である。

その一つが「ボランティア」である。ボランティアの取組は県内でもいち早く、1996(平成8)年に当館で実施されていたが、その後3年くらいで終わってしまっている。また、館全体の博

学連携に対する態度も年によって異なっている。先進的な取組や博学連携の考えがあっても、それが継続されていかなかったことが大きな課題である。

3 「さきたま史跡の博物館」における博学連携

2006(平成18)年に当館は再編整備され、「さきたま史跡の博物館」としてリニューアルした。ここでは、現在も続く博学連携の実践について紹介したい。

(1) 体験工房の完成

さきたま史跡の博物館のリニューアルオープンに伴い、2007(平成19)年から「さきたま体験工房」が新設された。現在では、一日4回のまが玉づくりと、夏休みにおける子供製作体験、2～3月のガラス玉づくりなどに、年間約2万人が利用する空間となっている。

(2) 出前授業「なるほど！古墳時代」

2013(平成23)年から実施され、現在も続く出前授業である。さきたま資料館時代の出前授業との違いは、①埴輪や土器などの実物資料をもとに授業を行うこと、②教員籍の職員と学芸員が一組となって学校に赴き授業を行うこと、の2点である。これまでの出前授業は、学校の教員と博物館の職員が入念な打ち合わせをして授業を行う必要があった。だが、「なるほど！古墳時代」では、当館職員が導入から終末まですべて授業をおこなうため、事前の打ち合わせが短く簡単にすむことになっている。そのため、実施時期が限定されるものの(ほとんどの小学校6年生は古代の学習を5～6月に実施する)多くの学校で実施できるという利点がある。現在では年間20校近くの学校で授業が実施されている。

(3) 自由研究相談窓口

2014(平成26)年の夏休み期間に始まった取組である。夏休み中に行う自由研究の一つとして、埼玉古墳群を活用した自由研究の方法を、子供たちに提案するものである。当初は夏休み中のうち3日間を指定し職員が待機して相談を受け付けていたが、現在はワークシートを館内に配架し、必要があれば職員に尋ねるという方法で実施している。現在提案しているテーマは、「埼玉古墳群の地図をつくろう」「国宝金錯銘鉄剣」の115文字を讀んでみよう」「古代のアクセサリガイドブックをつくろう」の3つである。

(4) さきたまのネタ

授業で活用できる教材として、2016(平成28)年、2017(平成29)年にまとめられた博学連携資料集である。詳細については、紀要を参考にさせていただきたいが、小学校から中学校まで全部で10の資料が紹介されている。現在では、小中学校の初任者研修などで教員に配布し、活用を図ってもらっている。

(5) 今後の博学連携について

「博学連携」の機運が盛り上がったのは、筆者が考えるかぎりこれまで2回あった。第一期は、

学校週休2日制の取組が始まった1992年(平成4年)ごろであり、土曜日の博物館利用が注目された時期である。第二期は、1998年(平成10年)の総合的な学習の時間が実施されたころである。いずれの時期も、「学社融合」、「博学融合」、「博学連携」などの言葉がキーワードとなり、当館でも様々な取組が行われた。

現在は、新学習指導要領で示された「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、学校が地域や社会教育施設関わりを深めようとしており、博学連携の機運が高まった3度目の時期であると言える。

前2回はそれぞれ成果はあったものの、それが現在まで続かなかつたり、優れた取組があつてもその時期だけで終わったりするものが多かった。今後の博学連携を考えると、筆者は、次の2点が必要であると考えます。

一つは、博学連携の取組をきちんと記録しておくことである。現在実施されている博学連携や取組の多くは、過去に実施されたり考案されたりしたものがほとんどである。記録があることでこれまでの取組を振り返り、新たな取組に生かすことができると考える。

二つは、学校側、博物館側にとって双方に利益のある取組を無理なく続けることである。博学連携の取組は、学校にとって「絶対になくしてはならない」というものではない。学校側が利益を感じられなかつたり、負担を感じたりするようになると取組は衰退してしまう。同様に、博物館側も職員の負担が大きいと実施が難しくなる。双方が持続的にできるような取組を行っていく、また、そのような取組に変えていくことが必要である。

最後に、筆者がこれまでの平成30年間の博学連携、教育普及事業をまとめたものが表1、表2である。館報などの資料をもとにまとめたが、実施時期や内容については不備な点も多い。多くの方から御教示、御指導賜れば幸いである。

《引用参考文献》

埼玉県立さきたま資料館 1989～2005 「館報」NO.19～36

埼玉県立さきたま史跡の博物館 2006～2018 「館報」NO.1～13

埼玉県立さきたま資料館 1996～2006 「調査研究報告」第9～19号

埼玉県立史跡の博物館 2007～2018 「埼玉県立史跡の博物館紀要」第1～11号

埼玉県立さきたま資料館 1989～2006 「広報紙 さきたま」Vol.1～17

表1 さきたまの博学連携事業(製作体験等)

西暦	元号	埴輪づくり	まが玉づくり	土器づくり	ペーパーパークラフト	アクセサリー	古代布	土鈴・土笛	土偶	貝輪づくり	ガラス玉づくり	火おこし	古代服・着	古代米体験
1989年	平成元年													
1990年	平成2年													
1991年	平成3年													
1992年	平成4年													
1993年	平成5年													
1994年	平成6年													
1995年	平成7年													
1996年	平成8年													
1997年	平成9年													
1998年	平成10年													
1999年	平成11年													
2000年	平成12年													
2001年	平成13年													
2002年	平成14年													
2003年	平成15年													
2004年	平成16年													
2005年	平成17年													
2006年	平成18年													
2007年	平成19年													
2008年	平成20年													
2009年	平成21年													
2010年	平成22年													
2011年	平成23年													
2012年	平成24年													
2013年	平成25年													
2014年	平成26年													
2015年	平成27年													
2016年	平成28年													
2017年	平成29年													
2018年	平成30年													

表2 さきたまの博学連携事業(古墳群を活用したもの、講座等)

西暦	元号	古墳群ガイドツアー	オリエンテーリング	バスツアー(県外)	発掘実習	古代劇	古墳ウルトラクイズ	埴輪復原体験	子供講座	教員講座	自由研究相談窓口
1989年	平成元年										
1990年	平成2年										
1991年	平成3年										
1992年	平成4年										
1993年	平成5年										
1994年	平成6年										
1995年	平成7年										
1996年	平成8年										
1997年	平成9年										
1998年	平成10年										
1999年	平成11年										
2000年	平成12年										
2001年	平成13年										
2002年	平成14年										
2003年	平成15年										
2004年	平成16年										
2005年	平成17年										
2006年	平成18年										
2007年	平成19年										
2008年	平成20年										
2009年	平成21年										
2010年	平成22年										
2011年	平成23年										
2012年	平成24年										
2013年	平成25年										
2014年	平成26年										
2015年	平成27年										
2016年	平成28年										
2017年	平成29年										
2018年	平成30年										